

第3回研究会

文化的景観を読み解く

—北九州のやきものの里での事例—

龍谷大学理工学部実験助手・里山学研究センター研究スタッフ

林 珠乃

文化的景観とは、地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの（文化財保護法第二条第1項第五号より）を指し、特に重要なものは、文化財保護法に基づき、「重要文化的景観」として選定されている。現在、選定されている38件の重要文化的景観の多くは、農業・漁業等第一次産業を主たる生業とする地域であり、第二次・第三次産業にかかわる活動によって形成された景観が選定されている例は少ない。

安土桃山時代以降、北部九州の各地で展開した窯業は、地域の自然資源を利用した生産活動により、地域性豊かな文化的景観を形成してきた。大分県日田市小鹿田地区は、現在でも伝統的な手法で作陶を行う焼き物の里であり、主たる生業が窯業である地域としては唯一重要文化的景観に選定されている。小鹿田地区に隣接する福岡県東峰村は、小石原焼と称される焼き物が焼かれ、小鹿田焼と密接な関係を持ちながら発展してきた焼き物の里である。この二つの焼き物の里は、製陶活動において、近代化または伝統保持の異なる道を辿った。そこで、二つの産地の現在と過去の景観構成要素の分布と自然資源の利用を文献調査から明らかにし、比較した。

景観構成要素として、窯元の所在地、窯、唐臼および唐臼小屋を選定し、位置情報をGISによって要約した。自然資源の利用として、山からの原土の採土、川の水力を利用した土の粉碎、および焼成に用いる薪の伐採があげられる。これらの自然資源利用は、社会経済情勢の影響を受け変化してきたが、その変化の様態は資源によって異なる。文献調査と聞き取り調査によって、自然資源利用の変化が明らかにした。また、小石原窯業の自然資源利用が大きく変わった1960年代と現在の土地利用を比較し、窯業が与えた影響について検討した。